地域の環境生かした保育

町も学びの場、深く関わる

認定こども園 清心幼稚園（前橋市）

子どもが「遊び」の中で楽しさや面白さを感じて創造的な発想や活動を生み出すとともに、主体的に物や人と関わって対話する環境を大切にしている、前橋市の学清心学園幼保連携型認定こども園清心幼稚園（栗原千代子園長、園児90人）。地域も生活の大事な環境と考え、地域と深く関わりながら保育を進めている。

明治28年に創立され、123年の歴史がある清心幼稚園。当時から地域との交流があり、近くの公園や施設を活用した園外での保育も日常的に行われていた。こうした歴史的背景もあり、現在も地域の特性を生かして保育に取り組んでいる。

前橋公園や中心商店街、芸術文化施設「アーツ前橋」などが歩いて行ける場所にあることをはじめ、園の周辺には豊かな環境がそろう。卒園生でもある中心商店街の商店主をはじめ、多くの地元の人が子どもたちの活動に協力するなど、ソフト面にも恵まれている。

こうしたことから、清心幼稚園には「園内にない環境は園外に求める」という文化がある。保育教諭でもある栗原啓祥副園長は「保育者が地域の人たちを頼り、地域を園の一部のように考えることができれば、保育の視野が広がる」と話す。

スタッフの男性と話しながら、ドラマの撮影を見守る子どもたち

公園や店などで対話重ね 多様な経験

保育では公園でピクニックしたり、商店街のお店で食材を探したり、アートを見に行ったりなど、子どもたちはさまざまな所に出掛けていく。園舎や園庭だけでなく、地域も生活の大事な環境となっている。

4月26日の5歳児クラスは、希望した子どもたちが近くの前橋公園に出掛けた。タンポポを摘んだり、チョウを捕まえたりすることに夢中になっている子もいれば、土手に上がってドラマの撮影を発見した子もいた。そこでは、他の子どもたちも集まり、スタッフの男性と話をしながら興味深く撮影の様子を見学していた。

他にも、散歩に来ていた人に頼んで犬を触らせてもらうなど、1日の中でいろいろな体験を得ていた。

過去には、こんな事例もあった。5歳児クラスのワークショップ講師として訪れた、熊本県天草市の陶芸家兄弟。彼らから届いたお礼の手紙と「天草の塩」をきっかけに、子どもたちのさまざまな活動につながっていった。

自分たちが育てた野菜とその塩が出合って塩もみして食べるとともに、「種屋さんにもプレゼントしたい」と野菜の種や苗を買った種苗店を訪問してお裾分け。熱中症予防で塩をなめて過ごす中で「お礼の手紙を書きたい」という思いから、手紙や絵などを入れた小包を郵便局から出すことにも挑戦した。

活動の中では子どもたちがいろいろと考えながら対話を重ね、地域の人たちとの交流を深めていく。種苗店に向かった時には過去の経験を思い出しながら歩くルートを考え、野菜を渡した後には偶然にも七夕の短冊作りを経験させてもらった。

郵便局を訪れた時には、職員と会話をする中で小包に相手の住所や名前を書くこと、切手を貼ることを教えてもらい、郵便物がどう届くかについても話を聞くことができた。

他にも、商店街ののり店や漬物店、美術館を訪問して店主や職員とコミュニケーションを深める、声を掛けられた地域の人が一緒に目的地を探す、目的地までの道中で見つけた犬や金魚に夢中になるなど、子どもたちは地域でさまざまな経験を重ねている。

ワークショップを制作手法に現代美術分野で活躍するアーティストの中島佑太さんと対話する保育実践も、こうした活動の一つ。今では保育者とアーティストが地域イベントに参加、企画してワークショップを行うなど、園と地域が協働した活動にも取り組む。

気付き増え発想豊かに 優しい町づくりにも

地域や社会と子どもたちが関わる保育活動を行うと、子どもたちにとって身近な生活の中に対話が生まれる。子どもたち自身の気付きが増え、発想も豊かになる。こうした中で、子どもたちは少しずつ世界を主体的に広げていく。

保育者は子どもたちの言葉や反応、偶然の出会いなどに柔軟に対応するため、子どもの姿を想像しながら、下見や事前の打ち合わせを行うように心掛ける。保育者にも新たな関わり・気付き・学びの場が生まれる。

栗原副園長は「子どもの多様な学びの環境を保障する上で、地域と交流しながら保育することが今まで以上に必要になる」と話す。そのためには、園と地域が対話しながら保育を展開することが大切で、子どもの姿を地域に届けることが優しい町づくりにもつながると考えている。

清心幼稚園＝☎027・231・2415

7面に関連記事

横浜市 スタートカリキュラムで公開授業

7月、幼児教育研究部会セミナー開催

野間教育研究所

（公財）野間教育研究所は7月16日午前11時から、東京大学で幼児教育研究部会セミナー「園・家庭・地域の豊かなコミュニケーションシステムをめざして～お便り・Webサイト等の実際～」を開催する。

「どのように保護者に園の保育や子どもの育ちを伝えていくのか」について、①お便り・Webサイトの研究内容紹介②保護者とのコミュニケーションを工夫している園の実践報告③参加者同士のディスカッション―を通して考える。

参加申し込みは、野間教育研究所にメール（yoiji-symp@nomaken.jp）で行う。

新要領・指針

どの子も

若月 芳浩
玉川大学教授
四季の森幼稚園園長

明確になってくると、保育者の関わりに困難な場面が見え隠れします。「子どもになぜこうした行為が続くのか」「なぜ保育室に入って来の姿を発揮したり、穏やかに見えた子どもが突然登園を渋ったり泣くことが増えたりするなど、集団への適応の個人差がはっきり見育者でも、結果として制止する言葉を掛け、禁止を強要したくなる時期でもあります。

子どもの発達のプロセスから考えると、周囲の出来事に興味・関心を持つのは、場や環境が変われば当然のことです。さらに探索したい気持ちが、内面から保育者は、そのずれを「発達に必要な経験」と認識して関わることが必要となります。

探索活動が一段落すると、次の探索へと移行することが多くあります。ただし、子どもによっては、同じことを長期間繰り返す場合もあります。さらに、係が形成されます。その信頼が園生活の安定を導き出すことを理解し、その先の課題を見据えながら関わっていくことが必要です。そのためには、園内での保育者間の連携が欠かせません。

次回は6月4日付掲載

続 保育のこころもち ▶118

秋田 喜代美
東京大学大学院教授

尊敬している元園長先生に話を伺う機会があった。みんなで園庭のデザインを考えながら名前を付けることでいろいろな工夫が生まれることを、ご自身の体験に基づきお話しくださった。単調な園庭を変えていく過程で「にこにこ通り」や「おひさまガーデン」などの名前を職員全員で考え、名付けていったという。

みんなで考え、名付けることで、その場が子どもたちにとってさらになじみ深くなった。そして、その場に行く時間を楽しみにし、「○○ガーデンに行ってくる」という子が増えるということを教えてくださった。保育者の先生方も、名付

ンテナン

があると

こうし

日の決ま

時間」

「なかよ

付け、活

に関連付

一体感やものゃ

子ども

中で特定

たり、作

けて「○○

と言った

物や栽培

けるよう

も多い。

固有の名

で、そこ

ニュースBOX

第12回「小学生『夢をかなえる』作文コンクール」 1～6年生まで

「小学生『夢をかなえる』作文コンクール」は、「ライフプランニング」＝「人生設計」の啓発を目的に平成19年から開催されている。

第9回からは、「個人賞」を高学年（5・6年生）と中・低学年（1～4年生）の2部門に分け、「学校賞」は最優秀賞の賞倍増、優秀学校賞対象校を2校に増やすなどの目的に平成19年から開校に増やすなどを図り好評を得た。

さらに第10回コンクール「課題図書」をリニューアルし理解しやすい

コンクール課題図書「夢をかなえる」（表紙と中面）

（公財）パナソニック成金贈呈式」を教育財団（東京都港区・小野元之理事長）は4月27日、今年度の第44回実践研究助成の「助成制度は、学力向上など教育

た。

同財団による